

る。しかも、前記のように、福地桜痴は、円朝に外国文学の情報を提供していた人物であるので、彼が、落語「死神」にかかわっている可能性が浮上してくる。

実は、ほぼ同様の推理は、すでに、(名人)の中の山本進氏の作品解題と(石井)にある。しかし、山本氏は、「クリスピーノ」ルーツ説を捨てていないため、「福地桜痴あたりが、グリムの原話も知り、イタリア・オペラも見聞したうえで、円朝に内容を教えたかと想像できなくもない」と述べ、グリムから「クリスピーノ」が作られ、これら二作から落語が作られたとしている。(石井)もほぼ同様であり、グリムから「クリスピーノ」が作られたとは書いていないが、この二作がともに落語のルーツであるとしている。膨大な情報を把握している山本氏や石井氏でさえ「クリスピーノ」を捨てられないのは、「クリスピーノ」ルーツ説があまりにも定着しすぎているためだろう。

(宇井)には、さきに述べた「クリスピーノ」のタイトルの誤記について、「福地桜痴あたりが外国でみたこのオペラを、『靴直しクリピスノ』とエケチット式に転倒しておぼえて帰り、それを通説屋が丸のみに伝承してきたのだろう」と書かれているが、この推測は、どうやら当たっていない。(今

村三)では、内容の紹介の中で、一応、主人公の名は「クリスピーノ」と正しく書かれており、(今村)(今村二)でも「クリスピーノ」となっているので、(今村四)が誤植であり、以後、これに基づいて書かれたものが、軒並み誤記を繰り返したというのが真相のように思われる。むしろ、疑うべきは、「クリスピーノ」ルーツ説そのものである。福地桜痴がかかわっているとすれば、彼が円朝に伝えたのは、あくまでグリム童話であって、「クリスピーノ」は全く関係ないのではないかと筆者は考えているのだが、もちろん、福地桜痴が「クリスピーノ」を知らなかったという保証もない。

現時点では、グリムの「死神の名づけ親」の日本への流入経路は不明と言わざるを得ない。が、円朝には、外国文学に詳しい文化人との交流があったようなので、円朝自身に語学力がなくても、情報収集の可能な環境は持っていたことになり、福地桜痴は、関与した人物の候補であると言える。そして、いずれにしても、「死神の名づけ親」は、落語化によって、実質的に、日本で最初に普及したグリム童話であったと言つてよいだろう。